

編集後記

編集委員

委員長

藤 田 郁 代

副委員長

立 石 雅 子

石 田 宏 代

今 井 智 子

宇 野 彰 準

勝 木 美 子

熊 倉 勇 子

倉 内 紀 子

小 林 範 子

城 間 将 江

鈴 木 恵 子

関 啓 子

玉 井 ふ み

深 浦 順 一

矢 守 麻 奈

言語聴覚研究第5巻1号をお届けします。

本号では第8回日本言語聴覚学会におけるシンポジウム「急性期における言語聴覚士のあり方」の講演内容がまとめられています。佐藤先生は言語聴覚士が画像と神経心理学的な症状とを対応づけられることが重要であると報告され、春原先生は症例により問題点も異なり、対応も異なるという前提に立って問題点の抽出を的確に行い、情報を統合すること、個別に対応の順序を考えていくことの重要性を強調されています。諏訪先生は適切に次の過程につなぐために、医療における仕組みの検討と同時に言語聴覚士としては軽快する症状と残存する症状の見極めが重要であると述べられ、布施先生は摂食・嚥下障害の場合には原因の確認と障害タイプの確認が重要であること、意識障害がある場合には症状について繰り返し評価すること、小さな変化を見逃さないことが重要であると報告されています。様々な要素が絡み合い、対応の難しい急性期であっても、評価、対応、先への継続のいずれにおいても、根拠に基づくより具体的に適切な対応が必要となっています。

石飛先生には第8回日本言語聴覚学会におけるセミナーの講演内容をご寄稿いただきました。医療機関ではNSTの取り組みがチームアプローチとして進む中、摂食・嚥下障害の評価と訓練を行う言語聴覚士の関わりが重要性を増していると報告されています。

原著論文は2点で、1つは聴覚情報処理障害の小児について症状の分析を行った報告、もう1つは読み書き障害の部分症状としてではなく視覚-運動能力の発達の遅れによると考えられた書字障害に関する報告です。いずれも就学しており、適切な言語聴覚療法が必要とされた症例です。特別支援教育が本格的にスタートし、言語聴覚士が関わる場面は今後とも増えていくことが予想されますが、適切に関わることでできるような体制の整備が望まれると同時に何ができるのか職種としてアピールしていくことが重要です。

調査報告として、学術研究部小委員会回復期リハビリテーション委員会が実施した回復期リハビリテーション病棟に関する全国調査の結果が報告されています。

6月には第9回日本言語聴覚学会が宇都宮において開催されます。医療、福祉、保健、教育、それぞれの領域にしっかりと根を張り、言語聴覚士が日々、実施していることをまとめて示すことで実績を積み重ねていくことがさらに求められています。
(立石雅子)

言語聴覚研究(第5巻 第1号)2008年3月15日発行

Japanese Journal of Speech, Language, and Hearing Research

編集・発行：日本言語聴覚士協会(会長：深浦順一)

〒160-0022 東京都新宿区新宿2-5-16 霞ビル801

(☎03-6412-9853 FAX 03-6412-9854) <http://www.jaslht.gr.jp/>

Published by Japanese Association of Speech-Language-Hearing Therapists (JAS), Kasumi-Build. #801, 2-5-16 Shinjuku Shinjuku-ku, Tokyo, 160-0022, Japan

©2008, Printed in Japan

制作・発売：(株)医学書院(代表：金原 優) <http://www.igaku-shoin.co.jp/>

〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23(振替口座00170-9-96693番)

販売部直通 ☎03-3817-5659・5660(FAX 03-3815-7804)

印刷所 (株)アイワード ☎011-241-9341(FAX 011-207-6178)

広告申込所 (株)医薬広告社 ☎03-3814-1971(FAX 03-3814-8915)